

長野県の考古学：近年の調査・研究動向

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11038

長野県の考古学 ―近年の調査・研究動向―

桜井秀雄

はじめに

本稿では、長野県における近年の調査・研究動向を私なりの視点からまとめ、長野県の考古学について概観してみたいと思う。

1. 調査状況

(1) 調査件数

長野県内の調査状況を知る上での基本資料は、県教育委員会が刊行する『長野県埋蔵文化財調査要覧』である（以下、『要覧』と略す）。本稿執筆段階で最新のものは『要覧その17―平成17年度―』であるため、平成17年度（2005）の資料となる。それによれば、平成17年度段階での遺跡数は14334件を数え、発掘調査件数は284件となっている。うち学術調査6件を除く278件は緊急調査である。

ここで簡略ながら長野県内の発掘調査件数につい

ての推移をみてみたい。記録が残るのは昭和25年度（1950）からであるが、昭和25年から37年度（1963）まではすべて学術調査のみであり、昭和25年には塩尻市の平出遺跡の調査が、昭和33年（1958）には富士見町の井戸尻遺跡の調査が行われている。そして、昭和38年度（1959）にはじめて緊急調査が行われ、昭和42年度（1967）からは緊急調査件数が学術調査件数を上回ってくるようになる。これは高度成長に伴う開発事業の増大に対応するものであり、昭和47年度（1972）には調査件数が135を数え、以降昭和56年度（1981）までは78～104件の間で推移する。

なお、昭和40年度（1965）には県教育委員会社会教育課に初めて埋蔵文化財担当者（指導主事）が配置された。昭和45年（1970）には中央自動車道西宮線建設に対応するための任意団体、中央道遺跡調査会が組織され、昭和56年（1981）に解散されるまでの12年間にわたり延べ193遺跡、総面積28万3千㎡の発掘調査を実施した。諏訪郡原村の阿久遺跡において縄文前期の方形柱列や大環状集石群が発見されたのは昭和51年（1976）のことであり、その後、昭和54年に国史跡に指定されるまで続いた保存運動は長野県考古学界において特筆すべきものである。

昭和57年度（1982）からは岡谷―更埴間を結ぶ長野自動車道の発掘調査がはじまり、同年には（財）長野県埋蔵文化財センターが発足し、その調査に対応することとなった。同時に沿線市町村でも関連事業にかかわる調査が増大し、また昭和40年代から本格的に始まった県営圃場整備事業が昭和50年代後半にはいるとさらに進んできたこともあいまって、昭和57年度に調査件数は130を超えて以降、調査件数はさらに増加の一途をたどるようになる。

昭和63年（1988）には調査件数は200を超えた。平成3年（1991）に平成10年開催の冬季オリンピックが長野市に決定されると、オリンピック施設やオリンピック道路、北陸新幹線などそのインフラ整備が急務となり、またそれに関連した公共事業をはじめとした各種開発が活発化してくるにより、長野県での発掘調査は未曾有の件数を数えることとなった。平成5年度に発掘調査件数が300を超え、平成11年度（1999）には最多の393件を数えることとなった。この平成11年度が調査件数のピークであり、平成12年度（2000）に公共事業の減少がはじまるとともに調査件数も以降

は減少傾向に転じているが、近年はおおむね 300 件前後となっている。

長野県埋蔵文化財センターは前述のとおり、昭和 57 年（1982）4 月に発足した。事務局の他、調査事務所を適宜設け、調査に対応してきた。開設時には岡谷調査事務所（～昭和 59 年）が置かれたがその後、松塩筑調査事務所（昭和 58～平成 2 年）、長野調査事務所（昭和 62～10 年）、佐久調査事務所（昭和 61～平成 6）が開設され、平成 4 年度（1992）には長野・佐久・中野（平成 4～7 年・平成 3 年度は支所）・上田（平成 4～9 年）の 4 調査事務所体制となり、県内各地の調査にあたってきた。平成 9 年度（1997）までは単独財団であったものが、平成 10 年度（1998）からは、（財）長野県文化振興事業団の一組織に改組され、現在に至っている。発足時から主に高速道路・新幹線建設に伴う発掘調査に対応してきたため、平成 4～6 年（1992～1994）のピーク時には事業量は 30 億円を超え、職員数も 100 名を上回る状況が続いた。その後は事業量・職員数とも急減し、国・県事業を中心とした調査に対応し、職員数は 30～40 名程で推移している。なお平成 20 年度（2008）は、埼玉県埋蔵文化財調査事業団から 2 名の派遣も受けて調査に臨んでいる。

県内の市町村数は現在 81（市 19・町 25・村 37）であり、平成 17 年度段階で埋蔵文化財担当職員は 98 名を数える。ちなみに平成 9 年度（1997）は 113 名であった。この差異は定年退職者と他部署への配置転換によるものと考えられる。この埋蔵文化財担当職員の配置については、ほとんどの市で配置されているのに対し、町村では置かれていないところが少なくないため、県全体でみると約半数程度の配置率である。木曽地域では木曽広域連合が郡内の発掘調査を担当してきた。

（2）調査機関

県内の発掘調査は、県の外郭団体である（財）長野県文化振興事業団 長野県埋蔵文化財センターと各市町村教育委員会により実施されている。民間調査機関の参入はない。

（3）博物館等

歴史系の県立博物館としては、長野県立歴史館がある。発足以来、（財）長野県文化振興事業団に属していたが、平成 16 年度（2004）からは県直営となっている。学芸部と管理部からなり、学芸部は、総合情報課・考古資料課・文献史料課の 3 課編成である。

年度	学術	緊急	総数	年度	学術	緊急	総数
1950 年	15	0	15	1978 年	10	68	78
1951 年	33	0	33	1979 年	10	94	104
1952 年	27	0	27	1980 年	12	91	103
1953 年	20	0	20	1981 年	9	85	94
1954 年	14	0	14	1982 年	21	111	132
1955 年	9	0	9	1983 年	15	107	122
1956 年	12	0	12	1984 年	18	127	145
1957 年	13	0	13	1985 年	20	177	197
1958 年	18	0	18	1986 年	20	132	152
1959 年	23	0	23	1987 年	14	195	209
1960 年	20	0	20	1988 年	27	200	227
1961 年	23	0	23	1989 年	14	204	218
1962 年	22	0	22	1990 年	15	224	239
1963 年	29	8	37	1991 年	15	259	274
1964 年	30	12	42	1992 年	18	221	239
1965 年	22	20	44	1993 年	19	307	326
1966 年	28	24	52	1994 年	18	272	290
1967 年	13	28	41	1995 年	13	311	324
1968 年	20	39	59	1996 年	16	322	338
1969 年	9	57	66	1997 年	18	327	345
1970 年	7	63	70	1998 年	25	349	374
1971 年	9	63	72	1999 年	21	372	393
1972 年	8	127	135	2000 年	16	296	312
1973 年	7	90	97	2001 年	19	314	333
1974 年	15	73	88	2002 年	9	308	317
1975 年	13	69	82	2003 年	12	345	357
1976 年	12	80	92	2004 年	15	303	318
1977 年	15	89	104	2005 年	6	278	284

表 1 長野県年度別発掘調査件数（『要覧』より）

一方、市町村立の博物館・博物館相当施設が多いのは長野県の特徴のひとつであろう。美術館を含めて、登録博物館 45・博物館相当施設 9 が設置されている。また博物館類似施設にいたっては自然系・美術系・民俗系を含めて市町村が設置したもので 200 を超えている。それぞれ特徴ある施設であり、地域に根ざした活動を行なっている。

2. 学会・研究会の活動

（1）全県単位の学会

長野県の考古学研究・保護活動の中心的存在を占めるのが長野県考古学会である。昭和 37 年（1962）に発足し、四十有余年の歴史をもつ。会員数は一般会員で約 400 人、他に藤森栄一賞受賞者・選考委員などの特別会員がいる。機関紙である『長野県考古学会誌』は本稿執筆段階で 124 号を数える。他には県教委の委託を受けた埋文パトロールを毎年実施しており、過去い

くつもの遺跡破壊を未然に防ぐ役割を果たしてきた。近年では南佐久郡臼田町（現佐久市）の離山遺跡の事例がある。本遺跡は保護措置なしに道路建設が行われていたところを埋文パトロールで発見されたものであり、その結果、記録保存のための発掘調査が実施された。また旧石器・縄文・弥生・古墳・古代の5つの研究部会があり、時代別に研究を進め、適宜研究会などを開催している。とりわけ、昨年度に発足した古代部会の活動には期待したい。その他、本会では藤森栄一賞の授与を昭和49年（1974）から行っており、本年で33回目を数える。

（2）地域単位の学会

長野県では、地域単位の考古学会も少なくなく、各地域に根ざした活動を行なっている。会員は埋文担当者や考古学専門家のみならず、考古学を愛する地元の方も多く参加しているところが多いのも特徴である。以下、主な学会の活動について触れてみたい。

筆者も事務局長として会の運営に参画している佐久考古学会は昭和45年（1970）に発足し、緊急発掘調査への参加や例会の開催、研修旅行などを軸とした活動を行なってきたが、近年では一般市民向けの講演会や公開講座・遺跡見学会などを通して地元の文化財や考古学調査の成果などを地域へ発信していく活動が主体となってきた。平成19年（2007）には信州大学教授笹本正治氏の講演と会員による基調報告およびパネディスカッションからなる、フォーラム「佐久と武田信玄」を開催し、本年は2月に宮本長二郎氏、6月に坪井清足氏の講演会を催している。なお、連絡紙『佐久考古通信』は昭和50年（1975）から年3～4号を刊行し続けてきたが、昨年100号に到達した。そこで『佐久の遺跡』と題したNo99・100記念号は遺跡ガイドブックとしても利用できるものを目指し、佐久地方を代表する42遺跡を紹介する特別編集版として刊行した。これは一般頒布も行い、また地元の埋蔵文化財を知ってもらうべく佐久地方の各学校にも配布している。

諏訪地方では昭和63年（1988）に発足した諏訪考古学研究会が精力的な活動を行っており、『会報』の発行や遺跡見学会、遺跡報告会の開催などを実施している。平成18年（2007）には『人間探求の考古学者・藤森栄一を読む』を刊行している。他にも中信考古学会では平出博物館との共催で遺跡報告会を開催し、昭和35年（1960）に発足した上伊那考古学会では本年、御子

柴遺跡の報告書を刊行し、それに関連したフォーラムを開催した。また下伊那考古学会も昭和41年（1966）の発足以来、各種の活動を行なっている。

（3）その他の主な研究会・団体

野尻湖発掘調査団は、昭和37年（1962）から野尻湖の継続調査を行なっている。市民参加型の「大衆発掘」は全国的にも注目を集めてきた。本年3月には第17次調査が行なわれた。

堤隆氏を中心とする八ヶ岳旧石器研究グループは、野辺山高原の旧石器遺跡の発掘調査や研究を進め、南佐久郡南牧村の中ッ原遺跡群等の発掘調査および報告書の刊行、平成5年（1993）には「シンポジウム 細石刃文化研究の新たな展開」を開催するなど活発な活動を進めている。

山麓考古同好会は『山麓考古』の発行を昭和50年（1975）より続けており、昨年には20号を刊行した。信州縄文文化研究会は例会の開催などを通して、縄文文化を多角的に追求する。また三上徹也氏を中心とする曾根遺跡研究会は、本年で発見100年目を迎える諏訪湖底の曾根遺跡について、その資料の掘り出しと再整理を精力的に行なっている。

（4）歴史・郷土史雑誌

長野県内には歴史・郷土史学会も多数あり、それぞれに会誌を発行しており、考古学関係の論文や遺跡・遺物紹介などが掲載されることも多い。主なものを列挙すれば、『信濃』（信濃史学会・月刊・考古学特集号あり）、『伊那』（伊那史学会・月刊・考古学特集号あり）、『伊那路』（上伊那郷土研究会・月刊）、『長野』（長野郷土史研究会・隔月刊）、『千曲』（東信史学会・年4回刊）、『須高』（須高郷土史研究会・年2回刊）、『高井』（高井地方史研究会・年4回刊）、『佐久』（佐久史談会）、『オール諏訪』（諏訪文化研究会・月刊）などがあげられる。

3. 近年の発掘調査・研究がもたらした新知見

ここでは近年注目される調査・研究成果をまとめてみたい。

（1）黒曜石原産地遺跡の調査

長野県は国内有数の黒曜石原産地を幾つも有しており、それに関連した注目すべき調査や世界遺産登録への取り組みがみられている。

200箇所近い採掘址が発見され、縄文黒曜石鉱山と

して脚光をあびた小県郡長和町鷹山遺跡群の星糞峠黒耀石原産地遺跡は、現在、国史跡指定を受け、史跡整備を進めている。

また諏訪郡下諏訪町東侯国有林内に所在し、もうひとつの縄文黒耀石鉱山として近年注目を集める下諏訪町星ヶ塔遺跡でも平成9年(1997)から継続しての調査が行なわれてきており、約5万㎡の範囲内に凹みは現在までに129箇所を数える。今後、さらに増える可能性が大きい。昨年の調査成果によれば、採掘坑壁面の工具痕や採掘された原石の打撃痕の観察により、鹿角ピックやハンマーストーンが採掘に使用された可能性の高いことが判明するなど、新たな知見も認められてきた。今後の調査・研究に目の離せない遺跡といえよう。

さて、こうした黒耀石原産地に関係する自治体である、茅野市・岡谷市・諏訪市・諏訪郡下諏訪町・小県郡長和町・南佐久郡佐久穂町では、首長を中心として黒耀石文化の保存・活用を支えるネットワークを組み、世界遺産に登録することをめざして活動することを目的として、「信州黒耀石サミット」の開催を平成16年から開催している。

(2) 弥生時代の新発見！

近年、弥生時代の注目される調査成果が県内各地で見られている。

長野県内において平成19年度(2007)最大の発見は、中野市柳沢遺跡の銅戈・銅鐸の出土であろう。弥生時代中期後半に埋められたと考えられる青銅器埋納坑が発見され、銅戈7本と銅鐸1口が出土した。発掘調査によって出土した完形の銅戈は東日本では例がなく、さらに複数の銅戈と銅鐸の埋納坑が発掘調査で確認できたのは国内初のことになる。なお、現場で埋納坑を土ごと切り取って県立歴史館内へ運び、室内作業ですべての青銅器をとりあげるといった調査方法をとった。その結果、本遺跡では北部九州から近畿地方の青銅器埋納と同じ扱いの埋納方法をとっており、さらに同時出土は全国初となる「大阪湾型」と「九州型」という2種類がみられることが判明するなど、本県のみならず日本列島の弥生文化の理解を見直す大きな発見となった。



Figure1 柳沢遺跡の青銅器埋納坑
(長野県埋蔵文化財センター 2008 より引用)

また平成18年度(2006)に佐久市西近津遺跡群で発見された超大型竪穴住居跡も特筆されるものである。本遺跡は佐久平の弥生遺跡密集地帯に所在する。このうちSB67と命名した後期の竪穴住居跡は検出段階で、主軸方向18m・短軸方向9.5m・立ち上がりが最深部で約75cmを測る。床面積は153㎡(46坪)に達し、国内最大級の規模を有する。主柱穴は4本で、南側に

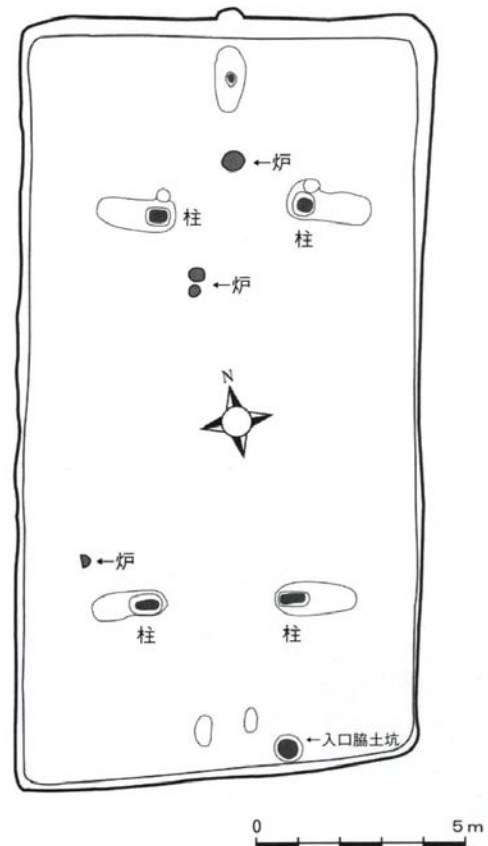


Figure 2 西近津遺跡群の超大型住居跡 SB67
(長野県埋蔵文化財センター 2007 より引用)

入口用の梯子を固定する柱穴が認められ、その脇には貯蔵穴の可能性をもつ土坑が1基みられる。炉は3ヶ所4基が設けられている。奥壁側中央に棟持ち柱用と思われる柱穴があることと桁行きの主柱穴間に補助柱穴があることは一般住居跡との大きな違いである。主柱穴は長楕円形を呈し、段を有している。これは大型柱材を設置、あるいは抜き取りやすくするためのものと考えられる。建築史の宮本長二郎氏によると、屋根が地面まで葺き下ろされない壁立ちの形式で、屋根は切妻と入母屋、あるいは寄棟を複合させた形が想定できるといふ。また高さは8～9mに達する可能性があり、首長のイエもしくは祭殿が想定されるということである（長野県埋蔵文化財センター 2007・佐久考古学会 2008）。

また近接してそれに次ぐ大きさの住居跡（長軸約14m）も検出されるなど、今後の整理作業により、こうした超大型住居跡の性格・遺跡内での位置づけなどが明らかになってくるであろう。

（3）善光寺の発掘調査相次ぐ！

平成19年度（2007）には長野市善光寺の発掘調査が相次いで行なわれ、今まで考古学的資料の少なかった古代～中世にかけての善光寺の姿がはいまみられるようになってきた。

元善町遺跡の明照殿地点では長野市の善光寺大本願で初となる境内の発掘調査が行なわれ、7世紀末～8世紀初頭の瓦が2000点余出土した。このなかには琵琶湖東側で多く出土し、渡来人との関係が強いとされる湖東式瓦も含まれており、今後の整理作業が大いに期待される。

同じく元善町遺跡の仁王門東地点では鎌倉時代の造成面、建物の礎石などを確認した。平安後期～鎌倉時代の瓦が出土したが、これは善光寺とその周辺での平安後期の軒丸瓦は初の発見となる。また漆喰壁も出土し、平安時代末期～鎌倉時代において瓦葺き建物が存在した可能性が大きくなった。中世善光寺における貴重な考古資料を提供する調査となったといえよう。

また中世門前町にあたる善光寺門前町跡八幡屋磯五郎大門町店地点の発掘調査では、溝は中世末には埋没したと考えられる2m程の溝とその周辺からは多量のかわけ・珠洲焼甕・瀬戸美濃系陶器皿などが出土した。

今後も善光寺関連遺跡の発掘調査の成果は大いに期待されよう。

（4）中世陥し穴の存在



Figure3 南平遺跡遠景（原村教委 1998 より引用）

平成9年（1997）に実施された諏訪郡原村の南平遺跡において、中世に位置づけられる陥し穴の存在が明らかとなった。本遺跡は国史跡の阿久遺跡の東方約1kmに位置する。本遺跡で発見された26基の陥し穴のうち、縄文時代の陥し穴とは形態・逆茂木の設置方法等を異にするタイプが12基みられた。その特徴は、①平面プランは、長楕円形を呈し、長軸方向に比べて短軸方向が極めて狭い。②壁は、短軸方向では坑底から中途まで垂直に立ち上がり、上中位付近で屈曲し、外側に開くものが多い。③鉄製工具による掘削痕が認められる。④坑底の形状は、四隅を直角に掘削した細長い長方形を呈する事例が大半である。⑤逆茂木の埋設方法は、先端を角錐状に極めて鋭く尖らせた逆茂木を打ち込んだ痕跡が確認できる「打ち込み型」である。の5点であり、このうち炭化逆茂木が残存していた2基について、放射性炭素年代測定（AMS法）を実施したところ16～17世紀の数値が得られた。これにより、前記の特徴をもつ陥し穴のタイプは中世陥し穴であることが明らかとなったのである。同じ年に近接して調査した原村の關盧沢遺跡でもAMS法による年代測定が行なわれ、ここでも16世紀という鑑定結果を得ている。

このような中世陥し穴は現在のところ、茅野市の馬捨場遺跡・鹿尾根遺跡、諏訪郡原村の南平遺跡・芝原尾根遺跡・前尾根遺跡・清水遺跡・恩膳西遺跡・上居沢尾根遺跡、諏訪郡富士見町の机原三本松遺跡・中尾遺跡北地区、それに山梨県北杜市の丘の公園第5遺跡の計12遺跡で認められる。詳しくは桜井2006を参照していただきたいが、これらはいずれも八ヶ岳南

麓にのみ分布している。私は諏訪神社の「神野（御狩野）」に関係するものではないかと理解するものであるが、今後さらに検討すべき重要な研究課題である。

この他にも県下 10 点目の古代印となる佐久市西近津遺跡群出土の銅印の発見や千曲市社宮司遺跡出土の六角木槿の発見など、注目すべき調査・研究は幾多と認められる。こうした考古学的新知見・新研究成果を踏まえて、長野県の考古学研究は新たな一頁をめくりつつあるといえよう。

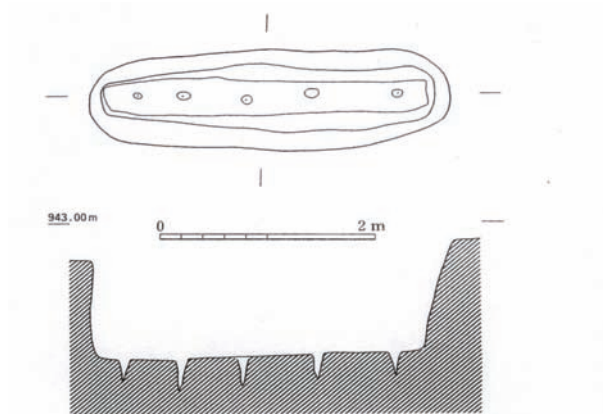


Figure4 中世陥し穴 小堅穴 135
(原村教委 1998 より引用)



Figure5 小堅穴 135 における逆茂木痕カッティング状況
(原村教委 1998 より引用)

引用参考文献

- 佐久考古学会 2007 『佐久の遺跡』 佐久考古通信 No99・100 記念号
桜井秀雄 2006 「ハヶ岳南麓の中世陥し穴」 『金沢大学考古学紀要 28』 金沢大学考古学研究室
桜井秀雄 2008 「長野県地方史研究の動向 考古学関係」 『信濃』 60 巻 6 号
長野県教育委員会 1973 他 『長野県埋蔵文化財発掘調査要覧』 その 2・その 3・その 4・その 9・その 17、本稿

で触れた調査件数などの数値はこれによる。

長野県埋蔵文化財センター 2007 「弥生時代における国内最大級の堅穴住居跡の発見」 『佐久考古通信 No98』

佐久考古学会

長野県埋蔵文化財センター 2008 『みすずかる 15 号』

長野県埋蔵文化財センター 2008 『速報写真グラフ 北信濃 柳沢遺跡の銅戈・銅鐸』 信濃毎日新聞社

長野県埋蔵文化財センター 1985～2008 『長野県埋蔵文化財センター年報 1～24』

長野市埋蔵文化財センター 2008 『所報』 No18

原村教育委員会 1998 『南平遺跡発掘調査概報』

(e-mail : sharekoma2@gmail.com)